



Title	日本における喫茶文化の発展：日常生活への普及を中心に
Author(s)	魏, 仙芳
Citation	文化/批評. 2010, 2, p. 106-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本における喫茶文化の発展

—— 日常生活への普及を中心に ——

魏 仙芳

1. 茶の研究史をめぐる

今日の日本の日常生活において、特に食生活ともてなしにおいて、茶は欠かせないものである。その茶というのは緑茶でもあり、紅茶でもあり、烏龍茶や麦茶でもある。最も多く消費されるのはペットボトル入りの茶飲料だろう。バラエティに富んで、誰でも好きなように茶を飲むことができる。そのほか、飲食店などでは烏龍茶や紅茶などを注文することができ、頼めば無料の緑茶や麦茶が提供される。いうまでもなく、茶は日本の日常生活に浸透している。

このような茶を飲む習慣はどのように日常生活と関わって定着しているかという問題を解明するために、筆者は第一次世界大戦後の昭和の日常生活における茶をめぐる人と場に関して考察した。そして、戦後では茶は家族でくつろぐ時、人が集まって話し合う時、一息休む（気分転換する）時、来客する時、そして食事する時に用いられることが判明した[魏 2007: 23-37]。現在と同様に、戦後の昭和の日常生活では、茶は様々な場において様々な役割を果たしていることが明らかになった。

日常生活に染み込んでいる茶は生活文化の一部であり、食文化の一部でもある。しかし、現代の生活スタイルに浸透し、多様化してきた茶は生活だけではなく、従来の茶産業においても、文化の面においても影響を与えている。日本の代表的な文化の一つとも言える喫茶文化の変化は様々な大きな課題を残している。現代の日常生活における喫茶文化の変容を解明するために、茶はいかに受容され、日本独自の文化として発展してきたかを明らかにする必要がある。そこで、現代の茶を論じるための前提を明らかにするために、本稿では、近代以前、茶を飲用する習慣がどのように普及し、日常生活において茶はどのように位置付けられてきたのかを考察したい。

日本茶の歴史的研究は主に上流階級に嗜まれる抹茶とその飲用法が中心である。そのほかの茶はどのように普及し、どのように発展して日常生活に欠かせないものとして定着したのか、また庶民に茶の飲用がどのように普及したのかという視点を含む研究はごくわずかしかない。抹茶以外の茶に関する研究が少ない理由は、庶民の生活に関する記録があま

りないからと考えられる。また、庶民が飲用する茶は主流ではないゆえに、茶に焦点を合わせる研究から見逃されやすいだろう。庶民の茶に関する研究が少ないことは、守屋毅の『茶の文化 その総合的研究』[1981]においても指摘されている。

近代以前の庶民の茶に関して、生活・風俗の歴史的研究や食文化の研究にわずかながら記載が認められる。例えば、葉茶を中心に研究を行う伊藤うめの「葉茶の飲用の歴史」[1974a,b,c]がある。伊藤は抹茶の飲用法を言及しながら、葉茶の飲用を中心に考察し、平安期から室町期まで葉茶を飲用する風習の普及について明らかにしている。また、ほとんどの資料は茶業に注目しているが、伊藤の研究は茶の飲用法に言及しているため、庶民はいつからどのように茶の飲用を始めたのか、上流階級との違いは何かについて明らかにしている。

大石貞男の『日本茶業発達史』[1983]では、中国と日本の茶の起源から近代までの日本茶の栽培の普及と製造の発展を考察している。これらの研究を通して、庶民の茶は日本に伝わってきてから近代まで、どのように庶民に普及し、発展してきたかを把握することができる。

橋本素子は中世の茶を中心に研究を行っている。「鎌倉時代における宋式喫茶文化の受容と展開について」[2001]は、鎌倉期における禅宗以外の抹茶の飲用法の普及を明らかにしており、庶民への普及についても触れている。また、「室町時代農村における宋式喫茶文化の受容について」[2002]では、抹茶の飲用法の庶民への普及を中心に考察している。しかし、橋本の研究は抹茶の飲用法に焦点を合わせており、庶民が飲用するそのほかの茶については検討していない。

産業の発達という視点で茶を飲用する風習の普及をとらえることもできる。庶民への普及に関してあまり言及していないが、参考資料として橋本の「中世における茶の生産と流通」[1999]、及び張建立の「平安時代から鎌倉時代における製茶」[2001]と「室町時代における茶園と製茶」[2002]などがある。張は「喫茶文化の歩みは、常に製茶の歴史と表裏の関係にある。喫茶の普及は製茶を促進する一方、その逆に製茶も喫茶の発展に大きな影響力をもっていることを看過してはならない」[2002: 797]という課題において、平安期から鎌倉期、室町期の歴史学的考察を通して、製茶と茶園による普及を明らかにしている。しかし、張の研究は主に茶園を持つことのできる寺院や武家など上流階級における茶の普及に注目しており、庶民への普及については言及していない。

また、近代以前の研究ではないが、守屋毅の『喫茶の文明史』[1992]には茶に関する様々な記述が載せられている。他の資料にない近世の庶民の茶を垣間見ることができる。そのほか、中村羊一郎は庶民の生活に密着する地域の茶の民俗学的研究を行っている。

『茶の民俗学』[1992]と『番茶と日本人』[1998]では、地方の民俗儀礼や習慣と茶の関連性が詳しく考察されている。これらで紹介される茶は地域的な特徴があるが、現在でも一般的に飲まれているものとは言えない。しかし、近代以前の庶民の茶の発展と繋がっているところがある。

以上のように、抹茶以外の茶に関する研究、庶民の茶に焦点を合わせる研究、茶を飲む風習の普及に関する研究は、一つの研究になっておらず、各研究分野において行われている。庶民の日常生活における茶の発展を明らかにするためには、これらの先行研究を整理する必要がある。そのため、本稿は以上の先行研究を用いて、抹茶以外の茶、特に庶民の茶の飲用を中心として、日常生活における茶の普及と発展をまとめる。茶が日本に伝わってから生活文化の一部として定着するまでの経緯を把握する。現代の日常生活に定着している喫茶文化はどのように人の生活と関わって歴史的に発展してきたかという視点で、日常生活における喫茶文化の発展を考察する。

ようするに、庶民に茶が普及する歴史的過程をたどりながら、茶と日常生活の関連性を検討する。この過程を通して、近代以前の茶を飲む習慣の普及、及び日常生活における茶の位置付けの確立が明らかになると思われる。また、茶の分類は様々であるが、本稿は茶の飲用法の変化、つまり飲み方に注目するため、茶の品種や栽培、そして製造法、加工された後の形（茶葉や抹茶）などの細かい分類にこだわらないことにする。

2. 茶を飲む風習の普及

この章では、茶を飲む風習がどのように庶民に広がったのかを考察し、茶の普及と日常生活の関連性を考えてみる。

2-1. 平安期の飲用状況

平安期、鎌倉期、そして室町期の茶の普及に関する研究を早くから行ったのは伊藤うめのである。伊藤の研究においては、平安期と鎌倉期にもたらされたのは、茶を飲む風習以外、茶の栽培方法や製造法、飲用法も日本に伝わってきたことを明らかにしている。そのほか、鎌倉後期と室町期に茶を飲む風習が庶民へ普及する経緯に関しても明らかにされている。伊藤は、平安時代に茶が伝わった後、僧侶の社会では早くから「仏前供茶」としてばかりでなく、嗜好飲料としても、寺院において茶を自給自足していたことを指摘している。また、僧侶が将来した飲用法は、抹茶の飲用法ではなく、主に茶葉を煮出して汁を飲む方法であると主張している[伊藤 1974b: 40-43]。つまり、茶葉の煎じ汁を飲用したわけである。また、貴族社会においても茶を飲む風習が流行っており、遣唐使廃

止後も衰えることがなかったという〔伊藤 1974b : 51〕。

一方、庶民層においては、「仏前供茶の風習の充実は、仏教信仰が下層民へ拡大・普及・盛行するとともに、庶民層で葉茶の飲用が盛行する基になる」〔伊藤 1974b : 52〕と述べている。また、空也が茶の煎じ汁を布施したことも庶民層への茶の伝播と関わり、空也が考案した茶筌を使用する振り茶の飲用習俗が庶民の間に形成されたという〔伊藤 1974b : 52-56〕。すなわち、平安期には中国（唐）の影響で、寺院の僧侶そして貴族社会において、茶を飲む風習が盛んになっていた一方で、庶民層でも寺院の僧侶が行う施茶がきっかけとなり、仏教信仰と行事を通じて茶を飲用することができるようになってきたのである。

鎌倉期に、栄西が抹茶の飲用法を中国（宋）からもたらした後、貴族や武家などの上流社会においては、特に抹茶の飲用が隆盛した。日常的に茶を飲用する寺院だけではなく、上流社会においても茶園の育成に力を入れた。特に室町時代には、茶園が数多く増えており、茶の生産量も大幅に増加したという〔張 2002 : 19〕。寺院と上流社会が茶の栽培や製茶技術に力を入れ、その上、流通が盛んになったため、茶を飲用する風習が広まった。しかし、茶の飲用の流行は上流社会だけではなく、庶民の間にも茶を飲む習慣が普及していた。中世の庶民における茶を飲用する風習の普及については、次節で述べてみよう。

2-2. 仏教信仰と茶の普及

平安期から仏教行事や施茶をきっかけとして、茶が飲用された。伊藤と張の研究によれば、当時の上流社会では茶を飲用する風習があったが、茶は貴重品であり、庶民には広まらなかったという。庶民の間に茶を飲用する習慣が普及し始めたのは、鎌倉後期である。鎌倉期から仏教信仰が隆盛しており、仏教の著しい普及によって茶を飲用する人も増えた。そのため、庶民が茶を飲用する習慣を身に付けたのである。

また、武家においては抹茶が流行しているが、公家と寺院が飲用する茶は抹茶に限らない。例えば寺院の場合、伊藤は「武家社会で抹茶の服用が隆盛しても、茶の需要の多い寺院では、時間と手間のかかる抹茶は特別な場合にのみ用い、日常は主として葉茶の煎じ汁で充足させていた」〔伊藤 1974c : 28〕と主張している。鎌倉期に抹茶を将来したのは僧侶であったから、寺院では抹茶を飲用すると考えられがちだが、実際日常的に飲用していたのは茶葉の煎じ汁であった。

伊藤は「葉茶の煎じ汁による喫茶の普及は仏教が庶民層へ普及するとともに庶民層で葉茶の飲用が普及・盛行する基となる」〔伊藤 1974c : 32〕と述べている。喫茶、すなわち仏前供茶は平安期から仏教とともに広がり、茶葉の煎じ汁の飲用も庶民の間に普及していった。また、霊場廻りが庶民層へと広まり、鎌倉期に風俗化していた。喫茶や各霊場で

仏前供茶をする風習の普及に加えて、巡礼の流行も煎じ茶の飲用の普及を拡大させたのである〔伊藤 1974c : 37-38〕。このように、仏教儀式で茶を扱う風習は仏教信仰とともに庶民に広まり、茶を飲用する風習を庶民に広げただけではなく、茶の飲用法の普及とも繋がっている。

抹茶は僧侶によって上流社会にもたらされた嗜好品だから、上流社会における茶の飲用の流行は仏教と深く関わっている。しかし、茶は仏教の行事においてよく用いられるものであり、僧侶が日常的に飲用するものでもあるため、仏教信仰が普及することによって、それにまつわる茶に関する風習も飲用法も庶民に広まったのである。したがって、庶民に茶を飲む習慣と飲用法が普及していった大きな契機としては、平安期から広まった仏教信仰の流行をあげることができるのである。

2-3. 生産量の増加による普及

茶の飲用が盛んになっている上流階級と寺院は茶園を作り、茶を生産していた。それによって、抹茶の原料として使う茶葉の需要・消費も増大した。茶葉を量産した結果、質の悪い茶葉も沢山生産された。そのため、庶民が抹茶に向かない粗末な茶葉を飲めるようになったという〔伊藤 1974c : 21〕。すなわち、茶葉の生産量が増加したため、庶民が茶葉を手に入れることができるようになったのである。

伊藤によると、鎌倉時代には交通路が発達し、霊場巡りやそのほかの参拝者、旅行者が急増したので、休憩所や宿場も街道に多く出現した。これらの休憩所において、茶葉の煎じ汁が旅行者たちに提供された。価格が手軽なため、煎じ茶は経済力の乏しい庶民層に普及するようになったということである〔伊藤 1974c : 24〕。大石は、茶が日本に伝わった後、地方では茶を栽培する産地が現れ、「鎌倉に幕府がおかれ東西の交通がはげしくなるにつれて、街道に茶を容易に飲める場所（茶店）ができ、すでに形成されていた茶の生産地から供給されていたものであろう」〔大石 1983 : 187〕と述べている。すなわち、地方では茶の生産地が形成され、休憩所に茶を供給することができたということである。

庶民の間に広まった茶葉の煎じ汁（煎じ茶）の原料は、抹茶として不向きな粗末な茶であるが、地方農民が自家栽培した茶もある。このように茶の生産量が増加したために、茶を提供する場所や茶を飲む機会が多くなったのである。このような休憩所の出現はまた、庶民に茶の飲用の習慣を広める大きな要因となった。

張は室町時代に入って、茶の生産量が大きく増えたことを明らかにしている〔張 2002 : 815〕。茶の生産量が増えると、当然、茶の飲用がさらに普及し、茶店や茶屋などが繁盛する。室町期に入ると、茶店は街道筋だけではなく、寺院の門前にもできている。熊倉功は

「京都の東寺南大門前の茶売り人たちが、東寺に対して誓約書を書いている。その茶売り人たちは、一服一銭と称する参詣人相手の茶屋であった」〔熊倉 1997 : 85〕と述べ、このような門前茶屋の存在も茶が庶民に普及する契機の一つとなったと指摘している〔熊倉 1997 : 87-88〕。

鎌倉時代から広がった栽培地以外、室町時代にはさらに茶の産地が広がり、中国から新しい製造法である釜炒り茶が九州に伝来した〔大石 1983 : 198-201〕。茶の普及が拡大するにつれ、日本の茶の生産地と各産地における茶の製造法も、徐々に広がり、多様になっていた。京都や埼玉、佐賀に見られる主な茶産地と各産地茶の特徴は室町期から確立されはじめた。

2-4. 上流階級文化の摂取

伊藤は茶葉の煎じ汁の隆盛は抹茶との相関関係にあると指摘し、抹茶の服用隆盛への推移を「鎌倉時代における僧侶による飲茶の奨励」と「鎌倉末期からの闘茶及び茶寄合の隆盛」という二つの視点から考察した〔伊藤 1974c : 24〕。「公武の社会で抹茶服用の習俗が広まるに従って、各地に茶園が作られ、それにとまって茶の産地を当てる賭遊び、即ち、闘茶の風習が起こった」〔伊藤 1974c : 25〕と記している。このような上流社会の嗜好や遊びを農民社会が模倣したのである。伊藤は以下のようにまとめている。

下剋上思想の進展とともに下級農民社会でも、上流社会や都市の風習、民俗行事などを取入れるようになり、庚申待（中略）・大福茶事・霊場廻り・社寺参詣等の民間信仰が盛行するにつれて、煎じ茶の湯の代りとしての地歩は益々固められ、応仁の乱によって貴族と禅僧が地方へ流亡し、京文化の地方伝播が行われて地方文化が著しく発展すると、食生活における煎じ茶の地位は不動のものとなって行った。

〔伊藤 1974c : 38〕

松本新八郎は、「鎌倉・室町期は庶民文化が公武文化に影響を与え、公武文化が庶民文化に取り入れられて、上層と下層の生活文化が交錯・融合している点に著しい特色がある」〔松本 1966 : 166〕と述べている。このような社会背景のもとで、上流階級の生活文化が庶民層の生活に受容されることができた。すなわち、上流階級の流行を庶民層が摂取することによって、茶の飲用が普及したのである。

抹茶は高級品であるため、庶民は下級の茶葉を煮出した茶の煎じ汁しか飲めなかった。そのため、庶民の飲用法は上流階級の飲用法と異なっている。しかし、伊藤は当時の庶民

が上流社会の抹茶の飲用法を模倣したと指摘している。一般庶民には高価な抹茶の飲用ができないが、茶筌を使って煎じ茶を振るという飲用法を取り入れたのである〔伊藤 1974c : 34〕。庶民の間で行われた茶筌を使う飲用法は、いわゆる振り茶である。経済力の乏しい庶民はこのように飲用法を模倣することによって、上流階級の趣味を楽しむことができたのだろう。

室町期に抹茶の飲用が盛んになり、やがて茶の湯が成立した。豊臣秀吉は黄金の茶室を建てるほど、茶の湯を愛好している。しかし、いくら茶の普及が著しくても、上流階級の文化が庶民層でも行われるようになったとしても、庶民は抹茶ではなく、茶葉の煎じ汁を飲用していた。それは、抹茶が武家社会の儀礼に溶け込み、儀式化していたため、ますます庶民には触れられないものになったからだろう。しかし、それでも庶民は上流階級の文化を摂取し、信仰に取り入れながら自らの茶文化を作り上げていったのである。

2-5. 鎌倉・室町期における喫茶文化

茶を飲用する風習が普及するにつれ、茶店や茶屋など茶を提供する場所も繁盛した。伊藤によると、室町期の茶店は巡礼者に対して茶代を請求していなかった。茶店のお茶サービスは、所によっては巡礼者だけではなく、出家や修験者にまで及んでおり、江戸時代になっても見られたということである〔伊藤 1974 : 37-38〕。茶は仏教と深く関わっているという理由から、仏教とゆかりのある人に無料で提供したのだろう。または施茶という寺院の行事から影響を受けたため、茶を施したと考えられる。

すべての茶店が無料で茶を提供したわけではない。また、提供したとしても、すべての人に提供したわけでもない。しかし、熊倉は「もてなしとしての茶が庶民のなかで一服一銭のような手軽なものとして展開してきた一方では、反対に、おそらく厳格な武家の式正の儀礼のなかにも、もてなしの茶が登場してくる」〔1997 : 90〕と述べている。「武家の式正の儀礼」の中のもてなしというのは、のちに成立した茶道のことである。茶が有料であろうが、茶の提供は客に対するもてなしとして表されるものである。つまり、飲食店などでもてなしとして茶が用いられることは、この時から誕生したということである。

鎌倉後期に武士階級の間に流行した闘茶や茶寄合は、茶の普及にともなって、南北朝の動乱期には庶民層が見習うようになっていった。この時の茶寄合などは茶を飲むための集まりであったが、この風習はのちに人々が集まって話し合う場において茶を出すことへと発展していったと考えられる。そのほか、休憩所としての茶店で茶を飲用することが、休憩する時に茶を飲む習慣として発展してきたのではないと思われる。

このように、来客に対するもてなしとして茶を出すこと、休憩する時の茶を飲む習慣、

話し合いの場に茶を用意すること、飲食店の無料茶を提供すること、これら日常生活における様々な茶に関わる習慣は、中世から茶の普及とともに成立し、後世に伝わっていったのである。

3. 茶を飲用する習慣の定着

江戸期になると、茶の飲用が日常生活に浸透していき、茶を飲用することは単なる儀礼的なものではなく、もはや日常的な慣行として定着している。この章では、新しい飲用法の流行、茶屋の繁盛と茶産業の発展を通して、江戸期における茶の普及に関して考察したい。

3-1. 外食産業と茶

江戸期には、大きい都市では茶屋が多く現れ、参勤交代をはじめ、様々な旅において利用された。江後迪子は、武家や町人、及び農民が旅する時に食事する場所と食事内容を整理し、宿泊所や休憩所としての茶屋の普及が明らかにしている [江後 1999 : 78-89]。西村松之助によれば、様々な商売の店がある江戸には食事処や休憩所としての茶屋以外に、茶葉を販売する茶屋も数多くあった [西村 1983 : 378-385]。また、田村栄太郎によると、『江戸自慢』には江戸で茶を飲む場所が溢れていると記されており、茶の種類と茶が提供される場所によって値段も様々である。『寛天見聞記』では、料理茶屋が流行し、料理の中に茶漬けがあり、出された茶は煎茶であることが記されている。そのほか、金亀山浅草寺の山門前の茶屋には「奈良茶飯」が出されることがや、来客に対する茶菓子が普及していることも述べられている [田村 1966 : 83-165]。

田村によれば、食事する場には茶があり、茶飯や茶漬けのような茶を使った料理が出されることがわかる。茶は飲み物として普及したばかりではなく、料理を通して普及したのである。飲み物であろうが、料理であろうが、茶は日常生活の中に、特に食生活において定着していると言えよう。また、茶店や茶屋だけではなく、料理屋でも、来客をもてなす時にも茶が出されているという。これらから、茶が普及している様子とともに、茶の経済的利益や茶と食事の関連性が読み取れる。

茶の湯の流行とも関係するだろうが、来客に対する茶菓子も普及したということは、茶を持ってもてなすことが江戸期から一般的になったということである。茶を提供する場所としての茶屋でも食事をとれるということは、茶と食が密接に関連している証拠である。この時期に形成された習慣、例えば食事する時に茶を飲む習慣があることや、食事する場所で茶を提供するサービスがあることなどは現在でも続けられている。日常生活が茶と深

く関わるようになったのも、茶を扱う商売が定着したのも、江戸期だと言えよう。

食事やもてなし以外の茶と関わる商売も、江戸期から普及した。田村〔1966〕は、休憩所としての茶屋や料理茶屋を紹介しており、その中で女性が接待する茶屋も数多く存在すると指摘している。女性の接待を提供する茶屋として運営する所もあれば、普通の茶屋から美女を置いたりする茶屋に変化する所もある〔田村 1966：218-219〕。

女性と関わる茶屋は江戸期から始まったわけではない。熊倉は、室町時代に東寺の門前の茶屋に対して出された禁令の古文書の中には、茶屋で働く女に関して記したものがあり、「どうやら、茶屋の女は茶ばかりでなく、よからぬことも売っていたらしい。茶という字が、しばしば色里の隠語で出てきたり、茶屋といえは、色っぽい世界を意味するようになるのは江戸時代のことだが、その源流はこんな門前の茶屋にもすでにあった」〔熊倉 1997：86〕と指摘している。しかし、江戸期から女性が接待する茶屋が繁盛するにつれ、茶屋には遊女屋のようなイメージが付けられ、性的サービスを受ける場所として認識されていったのである。

3-2. 茶産業の発展

茶で商売する茶屋や茶店などの繁盛は、茶から経済的利益が得られていたことを意味する。これも茶が日常生活や食生活に浸透している証拠である。言い換えれば、江戸期に茶の生産量も消費量も、すでに商品として見なすことができるほど増加してきたということである。それだけではなく、様々な銘柄、様々なランクの商品ができ、上層から下層の人々までが、それぞれの生活に応じて嗜めるようになった〔西山 1974：150〕。江戸期はすでに茶を営利的農作物として生産する産地が形成され、茶の生産も消費も大きく進展した時代なのである。

守屋は、江戸期において茶の生産拡大と供給増大が進展していったことには二つの基盤があったと主張している。一つは、自家用茶の生産が広がったことである。もう一つは、地方に出現した茶産地の貢献である〔守屋 1992：108〕。ようするに、茶産地の拡大が茶の普及に大きく貢献したということである。大石の研究によると、江戸時代には九州から関東・東北に至るまで、各地で茶の栽培製茶が行われるようになったという〔大石 1983：264〕。

また、茶の商売がいかに普及していたのかに関しては、農家が茶を栽培製造する際に、茶師と提携していたことから垣間見ることができる〔村井 1961：29〕。茶師が製造する茶葉は質のいい茶である。茶を生産する地方や農家では、茶は自家生産・自家消費するため、茶葉の質と飲用法にこだわらない。しかし、それを商品として販売するなら、抹茶か煎茶

向けのものとして製造しなければならない。自分では製造できないため、出稼ぎの職人に依頼するしかないであろう。茶師が出稼ぎにいけるというのは、茶を商品として製造する農家が多くなったということである。江戸期において、製茶の繁盛と茶が経済的利益のあるものとして扱われ始めたことは明らかである。

大石は茶の消費について、都市での消費が伸びるにつれて、茶の流通が発達するようになり、流通の拠点は単に大阪や江戸などの中央都市だけでなく、地方都市にまで及んでいたと指摘している [大石 1983 : 266]。また、守屋は都市の消費人口の増加が茶の商品価値を高めたと述べている [守屋 1992 : 112]。すなわち、中央都市の他にも、人口の集中する地方都市が現れ、流通の発達と消費人口の集中によって、都会の茶に対する需要が高くなったため、茶の商品としての価値も高まったということである。休憩所としての茶店や茶屋に加えて、都会では茶葉を販売する店や各地の茶を扱う問屋が多く現われた。現在の有名な茶葉販売の老舗は、ほとんどこの時期に成立したのである [西山 1974 : 58]。

茶の伝播には日常生活への浸透や生産と消費の向上が欠かせない。江戸期には、各地で茶の産地が形成され、茶の栽培や製造の技術も向上した。流通の発達と都会での人口集中によって、茶がますます人々の日常生活に浸透し、茶の需要も拡大した。この頃から茶の商品価値が上がり、次第に利益のある商品となった。江戸期から、茶が今日のように各地の日常生活に浸透し、茶産業の基盤が固まったと言えよう。

江戸後期には、茶は海外に輸出されるほど産業化されていった。茶の輸出状況に関しては、寺本益英編集の『日本茶業史資料集成 1 日本茶業史』[2003] と『日本茶業史資料集成 2 日本茶業史続編』[2003] に記載されている。政策として日本茶が輸出されたのは、アメリカと貿易関係を結んでからである。アメリカによる開国にともなって、初めて海外貿易の品として茶が輸出されたというのは、茶産業が成熟していたからにほかならない。つまり、茶が日本の重要な農産物として位置付けされたのは江戸後期、19 世紀後半においてである。幕末から、日本の茶の生産が飛躍的に伸び、現在でも極めて自給率の高い農産物となっているのは、茶が海外輸出向けの品として戦略的に生産が拡大されてきたからである。

3-3. 飲用法の多様化

茶の銘柄とともに、飲用法も多様になった。江戸期には、抹茶の飲用法と茶葉を煮出す飲用法に加えて、新たに現在の飲用法に近い茶が中国（明）から伝わってきた。茶葉を急須で淹れる飲用法がそれであり、文人と僧侶の間で広まり、煎茶道を形成したという [布目 1998 : 279]。江戸期には、抹茶は上流階級、特に武家社会や裕福な町人が享受するも

のであったが、新しく成立した煎茶道は文人の間に広まっていた。仲野泰裕は「江戸で使用された瀬戸美濃窯産の食器」において、煎茶の普及を明らかにし、「嗜好用具の中では、まず喫茶用具があり、江戸時代においては、煎茶の発展がとくに注目される点である」[1992: 41-43]と指摘している。このように、人口の増大した江戸において煎茶の茶道具が多く使用され、煎茶道が流行していた。

その一方で、農民の茶の飲み方について、守屋毅の『喫茶の文明史』では「江戸時代の様相をみると、こと常民のお茶に関するならば、かならずしも今日風の『淹し茶』が主流であったとは思われない。(中略) 鍋なり釜なりのなかで葉茶を煮出す方法が、大勢を占めていたと考えられるのである」[1992: 224-225]と述べられている。今の茶の淹れ方を、守屋は煎じ茶と区別するため、「淹し茶」という言葉で表わしている。江戸期の庶民は、鍋や釜で茶を煮出してから飲んでいたのである。

遺跡から出土した茶碗などの器物で茶の飲用を研究している長佐古真也は「日常茶飯のことー近世における喫茶習慣素描の試みー」において「江戸期には、現代の我々がイメージするような淹茶法の煎茶とは異なり、茶葉からさまざまな方法で煮出す煎じ茶が広く嗜まれていた」[2000: 112-113]と述べ、庶民は茶筥で点てる煎じ茶を飲用していたと指摘している。点てる煎じ茶と点てない煎じ茶は、江戸中期を中心とした段階では共存し、点てる煎じ茶が衰退し、現在のような急須で淹れる飲み方が一般化するの幕末だと主張している [2000: 114-117]。

長佐古が指摘する点てる煎じ茶というのは振り茶のことであり、南北朝から庶民の間に流行していた飲用法である。点てない煎じ茶というのは江戸期に伝わった急須で淹れる茶である。長佐古の研究によれば、急須で淹れる茶は文人や僧侶の間に流行していたが、下層階級の庶民にとっては茶葉の煎じ汁が一般的であったことが明らかである。

中村羊一郎は「煎茶が現在のように、蒸した葉を揉みながら乾燥させた結果として、鮮やかな緑色のお茶として飲めるようになったのは、たかだか江戸時代の中頃過ぎのことである。しかも一般の人々にこうした高級な煎茶が普及していったのは、幕末に茶が外国貿易の主要輸出品となって品質の向上がはかられ、生産高が急激に伸びてからだ」と指摘し、一般庶民が利用していたのは自家用か、ごく狭い市場だけで流通している番茶であったと主張している [中村 1998: 3]。

中村の主張は守屋と長佐古の主張と一致している。すなわち、現在一般的に使われている茶葉も、急須を用いる飲用法も、同様に幕末に一般化したということである。これは急須で淹れる飲用法は質が向上した茶、いわば煎茶に適しているからともに普及したということだろう。流通網の発展や消費人口の増加などは茶産業を発達させ、急須で淹れる飲用

法を普及させた要因であるが、飲用法の発展にともなって茶葉の製造法も改良されていったからこそ、日本の日常生活における喫茶文化が進展してきたのである。

茶を飲む習慣と日常生活における茶の位置付けはほとんど江戸期に確立されたが、都市部以外に住む庶民の日常生活においても茶が同様に扱われているとは言い切れない。茶を自家栽培できる農村部では、昔のままの飲用法が保持されてきた。しかし、経済の発展と生活の向上とともに、都市部の習慣も農村部に浸透し、急須を使う飲用法が大衆化し、いまや急須で茶を淹れることが日本の日常生活において一般的な茶の飲用法となっている。

3-4. 江戸期における茶文化

茶と料理を提供する茶屋の繁盛は経済の繁栄と外食産業の発達を物語っている一方で、食生活と茶の深い関連性を証明している。家庭内でも食事する時に茶を飲む習慣があることを証明する資料はないが、食事の場で茶が提供されるという茶屋から受け継いだ習慣によって、外食産業において茶が必要不可欠なものになったのである。現在でも、日本で食事する時に、茶が欠かせないものであり、飲食店で茶を提供する習慣があるのは、江戸期の茶屋から及ぼされた影響が大きかったと言える。

中世から、庶民は高級な抹茶が消費できなくても、上層階級の飲用法を摂取し、自らの茶文化を形成した。このような庶民の間に行われた振り茶、つまり茶葉の煎じ汁を茶筌で点てる飲用法は地方の茶文化を生み出し、現代まで残されている [中村 1992]。しかし、江戸期に煎茶道が流行し、急須で茶葉を淹れる飲用法が普及するにつれ、茶葉を煮出す飲用法も次第に衰退し、茶葉の煎じ汁を茶筌で点てる飲用法もなくなっていった。それは生活文化が向上する一方で、茶の製造法の進歩と大量生産によって、茶が庶民にも消費できるようになったからである。また、茶葉を淹れる飲用法は抹茶の飲用法よりも簡便であり、「淹し汁」が煎じ汁より味わいがよいため、急須で茶葉を淹れる飲用法が広く受け入れ、一般的な飲用法として定着してきたと考えられる。

茶は中世から宗教的意味を帯びた飲み物として、また嗜好品として、庶民に普及した。江戸期からさらに日常生活と深く関わり、様々な場において茶を用いる習慣が定着していった。茶産業が発達していき、様々な階層の生活や経済状態に応じた茶の銘柄やランク、そして飲用法も生み出された。抹茶を点てる飲用法、茶葉を煮だす（煎じる）飲用法、そして急須で淹れる飲用法は、ともに日本の喫茶文化として現在まで継承されてきた。むしろ、現在最も一般的な飲用法は、江戸期には新しい飲用法だった。しかし、茶を飲む習慣と日常生活における茶の位置付けはほとんど江戸期に確立された。つまり、日常生活における喫茶文化は江戸期に完成されたのである。

4. おわりに

本稿では、茶が庶民に普及してきた歴史的プロセスを整理し、茶と日常生活の関連性を考察した。日本喫茶文化の発展を茶の湯以外の茶からまとめることができたと思う。庶民の生活に、茶が普及したきっかけや理由を大きく次の四つにまとめることができる。仏教信仰の浸透、上流階級文化の摂取、茶店や茶屋の存在、自家生産・自家消費である。また、もてなしをする時、人が集まる時に茶を用いることと、休憩する時や食事する時に茶を飲むことは、茶が庶民に普及するとともに日常生活に定着してきたことも明らかになった。

仏教の伝播とともに、茶の飲用も日本に伝えられた。仏教信仰が民衆の間に普及するとともに、茶の飲用も広がったのである。現在でも民俗信仰において茶を用いる儀礼が多いのは、仏教信仰と茶の普及する過程には密接な関係があったからである。ところが、寺院の行事では抹茶を点てたが、庶民の宗教行事で使われる茶は抹茶ではない。抹茶は高価で庶民が消費できないという理由もあるが、庶民に伝わったのは僧侶の日常的に飲む茶葉の煎じ汁であったからという理由も考えられる。

日本に伝わった抹茶は高級な茶であるため、経済力の乏しい庶民は茶葉の煎じ汁しか飲めなかった。それでも、庶民は上流階級の茶を模倣し、茶筌で煎じ茶を点てたり、茶を楽しむ茶寄合や闘茶などを行ったりした。このように上流階級の文化を受容することによって、庶民は仏教行事において茶を飲むだけでなく、茶の飲み方や茶の楽しみ方も身につけ、嗜好品としての茶を認識するようになったのである。人が集まる場で茶が用いられることは、茶寄合などの茶遊びから発展してきたのではないかと思われる。

中世から江戸期まで、街道にある茶店や町にある茶屋の隆盛も、茶が庶民に普及する契機となった。このような茶店や茶屋で茶を飲むことは、一息休む時に茶を飲む習慣、また食事する時に茶を飲む習慣と密接に繋がっている。ようするに、喉を潤す飲み物としての茶、および食事における茶を飲む習慣の発生は、これら休憩所や食事の場、つまり外食という場や機会から受けた影響だと考えられる。また、飲食店で茶がサービスとして提供されることはじまりも、茶屋にあると考えられる。

最初に茶を栽培したのは、寺院と上流階級の持つ茶園である。しかし、茶の飲用が普及するにつれて、茶の需要が高くなり、庶民も茶を生産するようになった。自家生産・自家消費するため、経済力が高なくても、日常的に茶を飲むことができるようになる。余裕があれば販売することもできる。このような茶の飲用の普及にともなう栽培の拡大は、茶の生産技術の発達と茶の産業化に役立った。その結果、各地の茶産地には茶産業が生まれ、

地域的な茶文化も形成されていった。

江戸期において、茶産業も日常生活における茶の様々な位置付けも確立され、都市の発展と茶産業の発達とともに、急須で茶を淹れる飲用法が一般化していった。現在、それが最も日常的であり、身近な飲用法として定着している。一方、庶民の茶は習俗と結びつき、独特の地域的な茶文化を発展させてきた。日本の茶文化は茶の湯と日常生活における茶という二つの世界で分けられがちだが、より詳しく茶の長い歴史的な発展過程から判断すると、庶民の茶、つまり地方の茶は日本の喫茶文化の成立に大きな役割を果たしている。なぜなら、庶民に茶を飲用する風習が伝わらなければ、また地方における茶の生産が起これなければ、茶の飲用が庶民化しないし、日本の日常生活において茶は存在しなかったかもしれないのである。

このように、茶は様々な面において庶民の生活と関わっている。喫茶文化の普及は、すなわち茶の飲用の生活化と庶民化と言える。日本において、抹茶も葉茶もその歴史は同様に長いのである。抹茶とその飲用法は上層社会の文化として形成されたが、葉茶とその飲用法は庶民に浸透し、生活文化の変化とともに発展してきた。茶道は決まった道具や礼儀作法という形があるために守り続けられてきた。他方、日常生活の茶は日常生活に溶け込んで、歴史的に生活様式とともに変化しているため、その存在が見逃されやすいが、日常的な実践によって再生産されている。

しかし、茶道、日常生活の茶、地方の茶、この三つの茶文化が共存している日本では、現代の新しい茶の誕生によって、19世紀中頃から20世紀末、つまり江戸期から昭和期にかけての、これまでの喫茶文化が急激に変容している。それは道具も茶葉もいらない、必要な時にすぐ飲める缶やペットボトル入りの茶飲料である。茶道も地方の茶も歴史が長く、継承者が存在している。変化しつつも守られている。しかし、日常生活の茶は様々な場において再生産されており、常に生活様式の変化にともなって発展している。そのため、現代の日常生活に受け入れられた缶やペットボトル入りの茶飲料は、出現してから20年という短い期間しか経っていないが、大きな発展をみている〔魏 2004：47-53〕。この簡易な茶飲料は今や無視できない存在となっており、現在では、茶を飲まない人がいないと言えるほど、ペットボトル入り茶飲料が日常生活に染み込んでいる。『東京新聞』2002年7月1日付の記事では、『「急須を使って家で飲む」から『外出時に持ち歩きながら飲む』』といった緑茶の“野食（飲）化”が進行していると述べられ、緑茶の「アウトドア化」が指摘されている。かつては電車の中、街道で飲んだり食べたりすることはほとんどなかったと聞いたが、今ではペットボトル入り茶飲料が普及したせいか、人の前で堂々と飲んだり食べたりするようになった。若者達にとって茶は、家で飲むものではなく、外で持ち歩く飲

み物になっている。さらには、授業中の教室、会議の場などでは、ペットボトル入り茶飲料が並んでいる。このように、茶飲料の普及は現在の日常生活に染み込んで、日常生活の茶の光景が変わりつつある。

茶を淹れる行為も、茶を飲む場も不必要な便利で携帯できるペットボトル入りの茶飲料の誕生は、日本の喫茶文化においてどのような意味を持っているのか。江戸期に定着した茶を飲む習慣や日常生活における茶の位置付けに対して、その存在はどのような変化をもたらすのか。日本の喫茶文化の発展において、茶飲料はどのように位置付けられるのか。これらの問題は、今後、茶文化の研究において大きな課題となる。

文献

- 伊藤うめの 1974a「葉茶の飲用の歴史 第一報 葉茶の飲用の起源について」『風俗』12号、東京、日本風俗史学会。
- 1974b「葉茶の飲用の歴史 第二報 平安時代における飲茶について」『風俗』12号、東京、日本風俗史学会。
- 1974c「葉茶の飲用の歴史 第三報 鎌倉時代以降の飲茶について」『風俗』13号、東京、日本風俗史学会。
- 江後迪子 1999「江戸時代の旅の食事」『風俗史学』7号、東京、日本風俗史学会。
- 大石貞男 1983『日本茶業発達史』東京、農山漁村文化協会。
- 小川後楽 1998『煎茶への招待』東京、日本放送出版協会。
- 魏仙芳 2004「現代日本における喫茶をめぐる一考察—茶飲料を中心として—」『日本学報』23号、大阪大学大学院日本学研究室。
- 2007「戦後日本の日常生活における茶とジェンダー—『サザエさん』を手がかりに—」『日本学報』26号、大阪大学大学院日本学研究室。
- 熊倉功夫 1997『茶の湯の歴史 千利休まで』東京、朝日新聞社。
- 田村栄太郎 1966『江戸時代町人の生活』東京、雄山閣。
- 張建立 2001「平安時代から鎌倉時代における製茶」『芸能史研究』155号、京都、芸能史研究会。
- 2002「室町時代における茶園と製茶」『立命館文学』574号、京都、立命館大学人文学会。
- 寺本益英 2001『戦前期日本茶業史研究』東京、有斐閣。
- 2003『日本茶業史資料集成1 日本茶業史』東京、文生書院。
- 2003『日本茶業史資料集成2 日本茶業史續編』、東京、文生書院。
- 長佐古真也 2000「日常茶飯のこと—近世における喫茶習慣素描の試み—」江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』東京、吉川弘文館。
- 仲野泰裕 1992「江戸で使用された瀬戸美濃窯産の食器」江戸遺跡研究会編『江戸の食文化』東京、吉川弘文館。
- 中村羊一郎 1992『茶の民俗学』東京、名著出版。
- 1998『番茶と日本人』東京、吉川弘文館。

- 西山松之助 1974『日本生活文化史 第六巻 日本の生活の完成』東京、河出書房新社。
—— 1983『江戸の生活文化』東京、吉川弘文館。
- 布目潮風 1998『中国茶文化と日本』東京、汲古書院。
- 橋本素子 1999「中世における茶の生産と流通—茶業の成立—」西村圭子編『日本近世国家の諸相』東京、東京堂出版。
—— 2001「鎌倉時代における宋式喫茶文化の受容と展開について—顕密寺院を中心に—」『寧楽史苑』46号、奈良、奈良女子大学。
—— 2002「室町時代農村における宋式喫茶文化の受容について」『年報中世史研究』27号、名古屋、中世史研究会編集委員会。
- 松本新八郎 1966『日本生活文化史 第四巻 庶民生活の上昇』東京 河出書房新社
- 宮崎圓道 1978『中世仏教と庶民生活』京都、思文閣。
- 村井益男 1961「職人の経済生活と慣習」『日本生活風俗史3』東京、雄山閣。
- 守屋毅 1981『茶の文化 その総合的研究』東京、淡交社。
—— 1992『喫茶の文明史』京都、淡交社。
- 渡辺実 1964『日本食生活史』東京、吉川弘文館。